日本文学全集

島崎藤村集（一）

© 1966

日本文学全集9　島崎藤村集(一)
昭和四十一年十一月七日　印刷
昭和四十一年十一月十二日　発行
著者　島崎藤村
発行者　陶山巌
印刷者　高橋武夫
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
電話東京(265)六二一一　振替東京一五六六三
印刷　大日本印刷株式会社
製本　文勇堂製本株式会社
製函　石橋製本有限会社
本文用紙　東京紙器株式会社
クロス　東北パルプ株式会社
東洋クロス株式会社
定価　二九〇円
検印廃止
落丁、乱丁本は取りかえます

Printed in Japan

日本文学全集

島崎藤村集(一)

集英社

編集委員（五十音）
伊藤　整
井上　靖
中野好夫
丹羽文雄
平野　謙
装幀　伊藤憲治
挿絵　中村不折

目次

藤村詩抄　七
破戒　四六
ある女の生涯　二六二
伸び支度　二九六
新片町より　三〇三
千曲川のスケッチ　三三三
飯倉だより　三六四
注解　三九八
作家と作品　山室　静　四〇九
年表　四四一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

島崎藤村集(一)

藤村詩抄

自序

若菜集、一葉舟、夏草、落梅集の四巻をまとめて合本の詩集をつくりし時

遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。

そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の予言者のごとく叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばはり、いづれも明光と新声と空想とに酔へるがごとくなりき。

うらわかき想像は長き眠りより覚めて、民俗の言葉を飾れり。伝説はふたたびよみがへりぬ。自然はふたたび新しき色を帯びぬ。

明光はまのあたりなる生と死とを照せり、過去の壮大と衰頽とを照せり。

新しきうたびとの群の多くは、ただ穆実なる青年なりき。その芸術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた僞りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口唇にあふれ、感激の涙はかれらの頬をつたひしなり。こころみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寝食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの声に和しぬ。

詩歌は静かなるところにて思ひ起したる感動なりとかや。げにわが歌ぞおぞき苦闘の告白なる。

なげきと、わづらひとは、わが歌に残りぬ。思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いささかなる活動に励まされてわれも身と心とを救ひしなり。

誰か旧き生涯に安んぜむとするものぞ。おのがじし新しきを開かんと思へるぞ、若き人々のつとめなる。生命は力なり。力は声なり。声は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。

われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過しぬ。

芸術はわが願ひなり。されどわれは芸術を軽く見たりき。むしろわれは芸術を第二の人生と見たりき。また第二の自然とも見たりき。

ああ詩歌はわれにとりて自ら責むるの鞭にてありき。わが若き胸は溢れて、花も香もなき根無草とはなれり。われは今、青春の記念として、かかるおもひでの歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはするなり。

明治三十七年の夏

藤村

若菜集より

こころなきうたのしらべは
ひとふさのぶだうのごとし
なさけあるてにもつまれて
あたたかきさけとなるらむ

ぶだうだなふかくかかれる
むらさきのそれにあらねど
こころあるひとのなさけに
かげにおくふさのみつよつ

そはうたのわかきゆゑなり
あぢはひもいろもあさくて
おほかたはかみてすつべき
うたたねのゆめのそらごと

おえふ

処女ぞ経ぬるおほかたの
われは夢路を越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河をながむれば

水静なる江戸川の
ながれの岸にうまれいで
岸の桜の花影に
われは処女となりにけり

都鳥浮く大川に
流れてそそぐ川添の
白菫さく若草に
夢多かりし吾身かな

雲むらさきの九重の
大宮内につかへして
清涼殿の春の夜の
月の光に照らされつ

雲を彫め濤を刻り
霞をうかべ日をまねく
玉の台の欄干に
かかるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の
耀くさまを目にも見て
ときめきたまふさまざまの
ひとのころもの香をかげり

きらめき初むる暁星の
あしたの空に動くごと
あたりの光きゆるまで
さかえの人のさまも見き

天つみそらを渡る日の
影かたぶけるごとくにて
名の夕暮に消えて行く
秀でし人の末路も見き

春しづかなる御園生の
花に隠れて人を哭き
秋のひかりの窗に倚り
夕雲とほき友を恋ふ

ひとりの姉をうしなひて
大宮内の門を出で
けふ江戸川に来て見れば
秋はさみしきながめかな

桜の霜葉黄に落ちて
ゆきてかへらぬ江戸川や
流れゆく水静にて
あゆみは遅きわがおもひ

おのれも知らず世を経れば
若き命に堪へかねて
岸のほとりの草を藉き
微笑みて泣く吾身かな

おきぬ

みそらをかける猛鷲の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

人の処女の身に落ちて
花の姿に宿かれば
風雨に渇き雲に饑ゑ
天翔るべき術をのみ
願ふ心のなかれとて
黒髪長き吾身こそ
うまれながらの盲目なれ

芙蓉を前の身とすれば
泪は秋の花の露
小琴を前の身とすれば
愁は細き糸の音
いま前の世は鷲の身の
処女にあまる羽翼かな

ああ、あるときは吾心
あらゆるものをなげうちて
世はあぢきなき浅茅生の
茂れる宿と思ひなし
身は術もなき蟋蟀の
夜の野草にはひめぐり
ただいたづらに音をたてて

うたをうたふと思ふかな
色にわが身をあたふれば
処女のこころ鳥となり
恋に心をあたふれば
鳥の姿は処女にて
処女ながらも空の鳥
猛鷲ながら人の身の
天と地とに迷ひゐる
身の定めこそ悲しけれ

おくめ

こひしきままに家を出で
ここの岸よりかの岸へ
越えましものと来て見れば
千鳥鳴くなり夕まぐれ

こひには親も捨てはてて
やむよしもなき胸の火や
鬢の毛を吹く河風よ
せめてあはれと思へかし

河波暗く瀬を早み
流れて巌に砕くるも
君を思へば絶間なき
恋の火炎に乾くべし

きのふの雨の小休なく
水嵩や高くまさるとも
よひよひになくわがこひの
涙の滝におよばじな

しりたまはずやわがこひは
花鳥の絵にあらじかし
空鏡の印象砂の文字
梢の風の音にあらじ

しりたまはずやわがこひは
雄々しき君の手に触れて
嗚呼口紅をその口に
君にうつさでやむべきや

恋は吾身の社にて

君は社の神なれば
君の祭壇の上ならで
なににいのちを捧げまし

砕かば砕け河波よ
われに命はあるものを
河波高く泳ぎ行き
ひとりの神にこがれなむ

心のみかは手も足も
吾身はすべて火炎なり
思ひ乱れて嗚呼恋の
千筋の髪の波に流るる

おきく

くろかみながく
　　やはらかき
をんなごころを
　　たれかしる

をとこのかたる

ことのはを
まことととおもふ
　ことなかれ

をとめごころの
　あさくのみ
いひもつたふる
　をかしさや

みだれてながき
　鬢の毛を
黄楊の小櫛に
　かきあげよ

ああ月ぐさの
　きえぬべき
とひもするとは
　たがことば

とひて死なむと
　よみいでし
あつきなさけは

誰がうたぞ

みちのためには
　ちをながし
くにには死ぬる
　をとこあり

治兵衛はいづれ
　恋か名か
忠兵衛も名の
　ために果つ

ああむかしより
　こひ死にし
をとこのありと
　しるや君

をんなごころは
　いやさらに
ふかきなさけの
　ともるかな

小春はこひに
　　ちをながし
梅川こひの
　　ために死ぬ

*お七はこひの
　　ために焼け
*高尾はこひの
　　ために果つ

かなしからずや
　　*清姫は
蛇となれるも
　　こひゆゑに

やさしからずや
　　*佐容姫は
石となれるも
　　こひゆゑに

をとこのこひの
　　たはぶれは

たびにすてゆく
　　なさけのみ

こひするなかれ
　　をとめごよ
かなしむなかれ
　　わがともよ

こひするときと
　　かなしみと
いづれかながき
　　いづれみじかき

草枕

夕波くらく啼く千鳥
われは千鳥にあらねども
心の羽をうちふりて
さみしきかたに飛べるかな

若き心の一筋に
なぐさめもなくなげきわび

胸の氷のむすぼれて
とけて涙となりにけり

蘆葉を洗ふ白波の
流れて巖を出づるごと
思ひあまりて草枕
まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の
なきなぐさめを尋ね佗び
道なき森に分け入りて
などなき道をもとむらむ

われもそれかやうれひかや
野末に山に谷蔭に
見るよしもなき朝夕の
光もなくて秋暮れぬ

想も薄く身も暗く
残れる秋の花を見て
行くへもしらず流れ行く
水に涙の落つるかな

身を朝雲にたとふれば
ゆふべの雲の雨となり
身を夕雨にたとふれば
あしたの雨の風となる

されば落葉と身をなして
風に吹かれて飄り
朝の黄雲にともなはれ
夜白河を越えてけり

道なき今の身なればか
われは道なき野を慕ひ
思ひ乱れてみちのくの
宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿の宮城野よ
乱れて熱き吾身には
日影も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は

吹く北風を琴と聴き
悲み深き吾目には
色彩なき石も花と見き

ああ孤独の悲痛を
味ひ知れる人ならで
誰にかたらん冬の日の
かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば
空冬雲に覆はれて
身にふりかかる玉霰
袖の氷と閉ぢあへり

みぞれまじりの風勁く
小川の水の薄氷
氷のしたに音するは
流れて海に行く水か

啼いて羽風もたのもしく
雲に隠るるかささぎよ
光もうすき寒空の

「草枕」(「若菜集」初版より)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo